

バナキュラーからの変換

ブラジルワークショップと東京シンポジウムから



連 健夫

昨年、9月にブラジルにて「バナキュラーからの変換」というテーマでワークショップを行なった。参加したのは、学生、社会人16人に付添講師としての建築家4人である。98年にマレーシア・シンガポール、99年には韓国でワークショップを行ない、今回で三回目となる。これらを通じて、地域性・土着性の読み取りと変換の大切さを強く感じ、様々な場所をサイトにワークショップを続けていくことにより、画一的な建築手法によって生産されている無表情な建築・街並みに対して、何らかの有効な手法を得ることができるのではないかと考えている。

なぜブラジルなのか

今回、ブラジルをサイトに選んだ理由は、第1にドコモモ（近代建築保存の国際的団体）の国際会議がブラジルで開催されること、第2に訪問地であるサンパウロ、マセイオでバナキュラーを採集し近代都市ブラジリアで変換するというコントラストのあるプログラムを組むことができるということ、第3にブラジルは多様な文化を持ち、日本とは移民の歴史を背景とした繋がりがあるということである。幸い、国際交流基金の助成が得られ実現した。

エリートとしての近代建築？

サンパウロでは南條氏の紹介でブルーノ・バドバノ氏が建築フォーラムを主催してくれた。こちらからは中村

陽子氏と私が発表し、ブラジルからはアン・マリー・サマー氏とマルセル・スズキ氏が発表した。ディスカッションで興味深かったのは、近代建築がエリートの建築として今だに建築家の目指すスタイルとして強く位置づけられている点であった。会場からのコメントでは「日本は歴史があり、バナキュラーを見直すことに意味があるが、ブラジルはそうではない」という文化的異差を論じたもの、「ブラジルのクライアントが建築家に求めるものが近代建築」という建築家の役割を論じたもの、近代建築の普遍性・画一性に問題意識を持ち、地域的かつ時間の意味を建築に変換した事例としてリナ・ボ・ハルディー設計のSESCボンベアが紹介されるなど、文化も多様であるが、建築の見方も多様であることを感じた。

都会と地方都市の落差

サンパウロの近代高層ビル群とそれを取り囲むスラム街のコントラストも強烈であるが、地方の小都市と大都市の落差もブラジルの奥深さを感じざるを得ない。マールシャルデオードロという漁村では、貧困な生活の中にも我々が忘れかけている密度の濃い人のふれ合いを感じることができ、セルフビルドの粗末なレンガ造の店の中でプレイステーションの最新版で遊ぶ子供など、コントラストが至るところで見られる。マセイオでのマリア・アンジェリカ教授の講義では、マセイオの歴史を中心に近



サンパウロの周囲のスラム街、TV用のパラボランテナとのコントラストが興味深い



ブラジリア大学内で開催されたドコモモ国際会議